短　報

京都北山・八丁平湿原を抜ける林道について

布　谷　知　夫（大阪市立自然史博物館）

京都北山は数多くの人達に愛され，歩かされてた山である。現在も，主要交通網は完備されつつあるが，多彩なコースも荒廃しておらず，家族のハイキングから登山訓練まで，さまざまな利用のしかたをされている。市街地からバスに乗ればごくわずかな時間で山中に入る事のできる便利さと，残された豊かな自然は現在では，他に替える事のできない大きな魅力である。

この北山の東部，北に伸びた左京区の北端，久多に八丁平がある。八丁平は海抜約800mに位置し，京都府下第二の高峰，峰床山の東麓の高層湿原で，面積約100ha，周囲をスギ，ヒノキ植林と，雑木林・ブナ林でおおわれている。北山唯一の湿原であり，古くから注目されているが，生物環境等の調査結果は，これまでほとんど公表されていない。観光的にはあまり有名ではなく，北山を自分の足でコツコツ歩く人達の間で語りつがれてきた聖域であった。

この地域は，京都でも有数の過疎地域である。京都の市街地から直線距離で約20km，既設道路で約40km程度の位置にありながら，冬の豪雪と，京都市への合併以後の地域振興の無策により，おそらく全国的に見ても都心部に最も近い過疎地となった。有名な廃村八丁も近い。尾越では，1960年には15～16戸あったが，1972年には冬期は無人となり，雪のない時期だけ2組の老夫婦がくらしている。



図2　久多市有林と林道予定コース

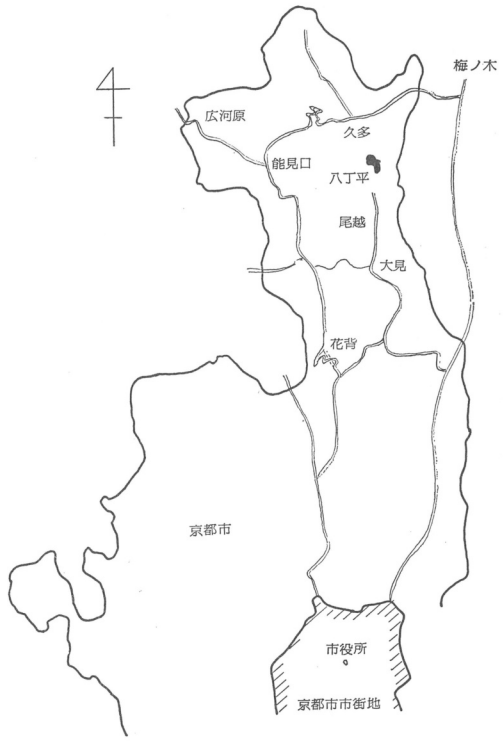


図1　京都市左京区北部の道路網と八丁平

八丁平は，この尾越と京都市最北端の村，久多との中間にあり，その約半分の51haは京都市有林，他の半分は私有林である。図2は八丁平の湿原部分を示してある。

現在までの経過

この八丁平を横ぎる林道建設の話が持ち上がったのは1969年であった。当時京都市は，それまでの南部工場地帯重視の政策から，北山地域に目を向けはじめた時期である。自然資源の再開発は，当時，公害反対・自然保護の声が大きくなっていた事に対応して，全国的な課題であった。

この林道は「大黒谷林道」と呼ばれ，尾越から八丁平を抜けて久多まで，12.5km，幅員3.6m，当面，八丁平までの国と府の補助を受けていた。当時の新聞報道によれば，総工費1億5千万円，8年計画で，1977年完成予定である。八丁平を含む久多市有林（177ha）は1956年頃から植林を始め，1960年当時で湿原地帯を残した大部

分，125haの造林を完了しており，「この林道が完成すると八丁平の林業，観光開発の“動脈”となり，資材の搬入，材の搬出，各種観光開発などに役立つ。また市内の最北端，久多へは……距離にして7～8km，所用時間にして30分前後短縮されることになる」とある。つまり，林業・観光開発・久多の振興の目的をもった林道計画であった。担当は，京都市経済局山林耕地課である。

ところが1971年になって約3kmが開通した後，林道工事は中断してしまっている。市の説明では，工事の取り合い道路が災害のためにいたんでしまったためと言い，また新聞報道では「尾越地区の離村による資材搬入道や木橋の荒廃と建設業者の敬遠が原因」とあるが，実際のところはよくわからない。その後京都市は，八丁平周辺を中心とした「自然公園整備に関する調査」を行ない（ただし未公開），湿原を守るための看板やビラ配布，巡視員を置くなど，八丁平保護の姿勢を見せていた。

ところが1978年になって，再びこの林道建設が再開された。5月20日付で「久多住民」から要望書が出され，新たに国と府の補助が得られる事が決定し，11月から工事が始まった。「久多住民」とはいうものの実際の住民の意志は明らかでなく，久多の人達もこの問題については口をとざしている。1969年当時とは異なり，計画は今のところまったく公表されていないが，当面1978年度は，既設部分から旧予定コースにそって400mの工事をするという計画であった。再開の理由を市は，荒廃していた道路の改修がすすんだ事と要望書の提出をあげている。

8月ごろ，この林道工事再開のニュースを伝え聞いた京都府山岳連盟や，八丁平に1966年から山小屋を持つ同志社大学ワンダーフォーゲル部は，それぞれ反対の意志表示をし，関係団体等へのアピールを始めている。また筆者らも「京都北山研究会」を結成し，情報の整理と八丁平に関する資料収集を始め，京都市山林耕地課へも事情を聞きに行き，反対の意志を伝えた。

大黒谷林道の問題点

京都市はこの問題を各地の自然保護運動でぶつかっている「開発と保護との矛盾」であるかのように説明しょうとしている。山岳連盟の反対のアピールを取材した朝日新聞（10月17日）に対し，山林耕地課長　嶋田氏は「自然保護と地元の地域振興とのかね合いをどこに置くかむずかしい問題だが……湿地を直接損なわないような方法を考えたい」と述べている。しかし八丁平をめぐる問題は決して地域振興と自然保護との矛盾ではなく，この林道が現在の計画のままでは，おそらく地域振興のためには用をなさないであろうという点にある。それに対して八丁平の破壊は，どういう工法をとっても，おそらく確実に進行するだろう。

当初，この林道の最大のメリットは，市街地へ約30分の時間短縮という点にあった。これまで久多から京都へは，広河原から花背を抜けるコースと滋賀県側へ出，梅ノ木から入るコースとがあったが，近年，花背トンネルが完成し，時間的にはずいぶん短縮された。また実際の文化圏としては滋賀県側に属すると言っても良く，梅ノ木コースは決して不便ではない。道路は多い方が良いとしても，この事だけであれば特に必要性はないと考えられる。それどころか，現在の計画では，当面林道の終点は八丁平までであり，八丁平から久多までは「将来計画」ということで具体化されていない。これでは「地域間連絡道」としての性格すら疑わしいと言わねばならない。1969年当時は，八丁平まで完成後，久多から八丁平にむけて林道をつなぐといわれていた。この間は市有林ではないため，もし林道を作るとすれば地元負担金が必要となる。道路の種類等によって補助率も異なるため，計画が決まっていない段階ではどれほどの額になるのか明らかでないが，地元での聞き取り調査では，そのような事情はまったく知らされておらず，道路を作ることについても知らない人が多い。1mの工費を5万円と見積っても，やはり数億円の工費がかかり，地元負担金は，多いと2割程度となる。少ない金額ではない。

また施業道として考えた場合，たしかに既設林道は利用されているが，すでに市有林の植林された部分を十分にカバーしており，例えば運材についても少し長い架線を使えば十分に施業可能である。八丁平を抜けて久多までつないだ場合，久多から仕事に入りやすいというのは事実かもしれない。しかしそのためであれば，他の山道はないのか，現地の市有林管理舎には宿泊できないのか，また実際どの程度の仕事量が久多住民にまわされるのかなど検討する必要があるだろう。少なくとも八丁平を林道で抜く必要はまったくないわけである。

地域振興について，地元の事情をよく知らないものが述べる事には多少の抵抗がある。しかし，道路ができれば何もかもうまくゆく，というのは幻想であることは，すでに各地の例からも明らかであろう。道路はスムーズに離村を助ける手段になりかねないのである。過疎地の不安は，医者，学校，福祉の三点が特に大きいと聞いている。これらに対する行政の保障に加えて，その地域の自然環境を生かした健全な地場産業の育成が必要であ

る。具体例の前ではたしかに困難であるが，少なくとも今回の場合，この林道によって地元が潤うことはほとんどない。山林耕地課だけでなく，市全体の総合的な地域計画こそ必要なのである。

また，この道路は八丁平を中心とする観光レクリェーションを目的の1つとしている。これについては多くを述べる必要はないだろう。車ですぐ横まで乗りつけるような観光地ではない。八丁平は山道を歩き，自然を自分の体で楽しんでこそ価値のある所である。湿原は多人数を収容する観光地としては耐え得ないものであることはすでによく知られている。またマイカー族の自然の中でのマナーの悪さも，残念ながら周知の事と言って良かろう。レクリェーションの場として考えるのなら，これについても安易に道路を通すのでなく，八丁平を北山全体の計画の中に位置づけ，自然学習の場として，指導員やヴィジターセンターのような施設を作り，その事によって自然が荒らされることのないような配慮なしには考えるべきではない。

お　わ　り　に

すでに述べたように，市はこれまで八丁平を保護する姿勢を見せ，今回の問題が表面化して後も，同様の見解を述べている。しかし今までのところ，工法を変えたいというだけで，八丁平を通らないようにするという事は述べられたことがない。筆者は二度京都市役所を訪ね説明を求めたが，「地域間連絡道を作る事は市の方針である。今年度（1978年）以後のコースについては未定である。八丁平を守らなければならないから道路をつけないという事にはならない。これから現況調査を行ないたいが，その調査結果は林道計画には影響なく，また将来計画は含まれない。」ということであった。

この説明は山林耕地課林政係長によるものであるが，補助金の経過や今後の計画等の具体的な説明は得られず，課長が説明する，ということであった。しかし，約束にもかかわらず，今のところ課長との会見の機会は作られていない。そしてすでに，1978年度に計画されていた400mの工事は終り，今後の予定は発表されていない。

現在，私達はコース変更などの対策は持っていない。当面は計画の中止を希望したい。また八丁平についての資料が少なく，この地域の特徴と価値についても不明な点が多いため，学術調査も行なってゆくつもりである。

京都府山岳連盟自然保護委員会は京都市長への要望書を近く提出する事にしており，また同大WV部は反対署名や地元へのアンケート調査等を行なっている。

地元でこの道路への要望が強いのは事実であろう。しかし，それならばなぜ一度始まった工事が7年間も中断され，また今になって，地元の要望があるためという理由で始まったのか，まったく不可解である。林道を無理に通す前に久多の総合的な振興・整備計画を希望したい。例えば，久多には現在市バスの路線すらない。せめて1日2往復のバスが必要である。広河原へのバス路線を，寄り道することにしても良いだろう。

なお，この報告を書くにあたって資料の多くを中川泉氏より教えていただいた。中川氏は山林耕地課の巡視員で，一年の多くの日数を八丁平ですごしておられる方である。（1979年1月10日）

追　　記

1．山岳愛好者によって「八丁平を林道から守る会」が結成され，1月17日，反対署名（926名）と工事中止の要望書を京都市長あてに提出した。これに対し市（鳥養助役）は，「学術調査を行なう。ただし調査は工事と並行して行なう」と答えている。

2．同じく1月17日，同志社大学ワンダーフォーゲル部も約2000名の反対署名を提出した。

3．これらの動きが各新聞に報道され，計画の一部が発表されている。現在の計画は，53，54，55年の3年間で1500mの工事を行ない，峠を越えて八丁平に80m入った所を終点とし，そのあたりに貯木場および，トラックの方向転換のための場所を作るということである。わざわざ峠を越えた所にそのような場所を作ることが，いかに不合理なことであるかは言うまでもない。（1979年2月1日）

資　　料

京都府山岳連盟の要望書

昭和54年2月5日

京都市長
船橋求己殿

京都府山岳連盟
自然保護委員会
委員長　角倉　太郎

京都市左京区大原尾越町と久多下の町とのほぼ中間，京都府下第2の高峰，峰床山（972m）の東下にある「八丁平」は，標高が約800mで，京都府下における唯一の高層湿原で，四囲を自然林にかこまれた平坦な原を展開していて，学術上はもとより自然を愛する者たちにとっても，現京都府下におけるかけがえのない貴重な自然であります。

この八丁平を含む約500haの市有林（一部民有林）に昭和44年度から尾越・久多間の林道開設が始まり，昭和45～46年に八丁平の方向に工事が進められてきましたので，当山岳連盟から左京区長あてに「今後の開発に対する質問書（47.3.23）を提出しましたところ「計画では林道は八丁平を通過する予定（47.4.4）」との応答がありましたので，直ちに「林道開設は八丁平を避ける方法を配慮ねがいたい」旨申出ましたところ「検討する」とのことで，その後，中断状態になっていました。

この間，八丁平の現地には，京都市経済局山林耕地課によって「ここ八丁平は，高層湿原温帯林の自然林の地域です。貴重な市民の財産として，又私達にとって，かけがえのない自然を守るためご協力をお願いします」と記載した標板を数カ所に建植されました。

現地におけるこうした標板の建植は，京都市当局が「市民の森」として八丁平のすぐれた自然の保全に積極的な姿勢を示されたものと理解し，私たちも一般登山者やハイカーたちにも広くこの地の自然保護を訴えてきました。

ところが昨年10月に至り，林道の中断地点からの延長工事が再開され，その指向方向は八丁平にあることが判明しました。

当山岳連盟としては，八丁平の高層湿原を中心とする自然林一帯の現状保全を強く念願していますので，「京都府下における貴重な八丁平高層湿原保全のため，林道の延長が八丁平を通らないこと」を要望いたします。

以上，要望について何分のご回答をお願いいたします。

新刊紹介

自然かんさつ入門

紫田　敏隆 著　小学館

183pp　450円

ものすごい情報量である。その質を問わなければ，現代の子供たちは，昔の学識者をはるかにしのいでいるだろう。といって，決して偉くなってはいない。

わたしたちは，情報量のあまりの多さに幻惑され，自分の頭で考え，自分の目でものを観ることを忘れてしまったのではないだろうか。

抽象的な理念を頭から頭へ移すことが，教育といわれていないだろうか。

いま一匹の動物が暗闇から誕生する。触れる。徳く。見る。味わう。彼が経験できるのは，あくまでも具体的なものである。

具体的なものは，それ一個を切り離して取りあげると，日常的な平凡なものに過ぎない。しかし，具体的なものが，頭の中に積み重なると，それは生き生きとした思想になる。その思想を培かって欲しいという著者の願いがひしひしと感じられるのがこの本である。

著者は，はげしい勢いで都会化が進みはじめた20年前から，三浦半島自然保護の会を主催されている。自然に接する機会が少ない子供を野外に導き，できるだけ具体的なものに触れさせることは，当時としては，先駆的な催しであったにちがいない。運よく，すばらしき同志にめぐまれたこともあり，様々な試行錯誤の結果得られた自然観察へのいざないは，今では，全国各地にくりひろげられている自然観察会へと広がっている。この本は，その結果のエッセンスとして，こども向けに書かれている入門書ではあるが，こどもが自分でこつこつと観察していくことを踏まえ，観察グループを組織して，皆で協力してやってみようという組織的な観察にも，目をむけて書かれている点では，今迄になかったものである。ただ，そのために個々の観察が，環境別の概要的な方法のみの記載に終り，20年間に培われてきた様々な観察事項のポイントのおさえかた，気のつけかたなど，実際に著者らが得たなま身の資料については，あまり触れられておらず，若干教科書的になっているのは残念だ。

まして，五感を通して自然観察会をやろうというわりには，用具の使用，服装の注意などの指摘が多すぎる。できるだけ，安全な自然観察を行うために，実践を通して得た教訓を生かしたい意図はくみとれるが，ちょっぴり危険性が含まれていた方が，自然観察らしいのではと思うのは私だけだろうか。危険を感じつつ観察をする方が五感を育成するうえで重要なことだと思う。

されど，全国で培われ，練りあげられてきた自然観察の方法を集大成して，わかりやすくしあげた点で，この本の意義は大きい。

著者自身，各地の自然観察会を催している人々に早く自分たちをのり越えていってもらいたいという願いをこめて書かれたにちがいない。

（中田千佳夫）

☆　　☆

☆　　☆